

漢字教育のヒント

—正しく、効果的に—

塚田 勝郎

漢字の学習は、小・中・高のどの校種においても、国語教育の重要な柱の一つです。しかし、小・中学校では漢字教育が、必ずしも正しく、効果的に行われているように見えません。また高校では、生徒の漢字の力を伸ばす工夫が足りないように思えます。

ここでは、「正しく、効果的に」をキーワードに、校種ごとに漢字指導の方法を論じようと思います。ただし、私には高校以外の勤務経験がありません。小・中の漢字教育については、高校の授業の中で気づいたことや、所属学会での活動（小・中学校の国語教科書における漢字指導の問題点の研究）から考察したことが主です。錯誤がありましたら、忌憚なくご指摘ください。

1 小学校の漢字教育

(1) 教科書の問題点①

低学年の教科書には、きまつて象形文字や指事文字を使った字源解説が掲載されています。しかし、象形文字・指事文字の数には限りがあり、中にはうまく説明できないものもあります。この試みは動機付けとしての意味はあるものの、広がりがないのが欠点です。

成り立ちの説明に使われている象形文字・指事字の例

人 木 口 日 月 上 中 下 (学図・小一上)

山 水 雨 上 下 (光村・小一上)

上 下 三 (教出・小一下)

(2) 教科書の問題点②

字源説（漢字の成り立ちに関する学説）には、様々な立場があります。しかし、教科書を見る限り、その説が誰のものなのかは不明です。この点は中学校の教科書でも同様です。主な説を日本に絞って紹介します。

主要字源説

* 日本に限る。

《藤堂説》

加藤常賢（一八九四〜一九七八）↓藤堂明保（一九一五〜一九八五）↓加納喜光（一九四〇〜）

《白川説》

白川静（一九一〇〜二〇〇六）↓落合淳思（一九七四〜）

小学校一年生が習う「口」の字源は、伝統的な説や藤堂説では、口を描いた図形と説明されます。しかし白川説では、「口」は「サイ」という「祝禱の器の形」と説明しています。藤堂説と白川説で字源が異なる漢字は、範囲を教育漢字に絞っても少なくありません。

一見停滞しているかのように見える字源研究ですが、近年は日本でも中国でも、新しい説が続々と発表されています。教科書の字源解説も、最新の研究成果によって随時見直す必要があるでしょう。

(3) 教科書の問題点③

小学校五・六年で初めて習う形声文字の概念は、字源解説に誤りが散見されます。その一例です。

形声文字の誤った説明の例

× 庁 ㄥ 十 丁 ○ 廳 ㄥ 广 (家屋) + 聽 (よく聴く)
× 肺 ㄥ 月 十 市 ○ 肺 ㄥ 月 (肉体) + 市 (パツと開く)

× 鉞 ㄥ 金 十 広 ○ 鑛 ㄥ 金 (金属) + 廣 (キラキラ光る)
× 秘 ㄥ 禾 十 必 ○ 示 (神、祭壇) + 必 (とぎす、かくす)

「庁」と「鉞」は、旧字体（正字）によらず、新字体で説明したために誤った例です。「肺」と「秘」は、当用漢字制定の際に誤った字体が採用されました。「肺」は一画増え、「秘」は不思議なことに、部首が「示（神、祭壇）」から「禾（穀物、作物）」に変わりました。

(4) 漢字指導への提言①

世間に流布している根拠のない通俗字解（おもしろ字源解説）は、教室では封印しましょう。「この漢字はこう見える」ことと、「この漢字の字源はこうである」ことを、しっかり区別する必要があります。字源を説明する場合は、空想や妄想に頼らずに、必ず漢和辞典の解字欄を参照しましょう。

通俗字解（おもしろ字源解説）の例

× 人と人で「人」。*「人と人」だと「从（従）」になる。

× 糸を半分ずつ持つから「絆」。
× 「食」は人を良くする。

× 柏の木に囲まれた神聖な場所で打つから「柏手」
 * 「柏手」は「拍手」の誤記。「柏」はカシワで
 はなく、ヒノキやコノテガシワなど常緑針葉樹の
 総称。

× 「武」は「戈^ゴ」を「止める」と書く。争いを止
 るのが「武」の役割だ。* 「止」は足の形を描い
 たもの。ここでは「とめる」ではなく、「すすむ」
 の意。

「人・絆・食」については、漢和辞典の解字欄を見
 れば、通俗字解を簡単に論破できます。

(5) 漢字指導への提言②

漢字学習では、音と訓の区別が重要です。「耳で聞
 いて意味がわかるのは訓読み、そうでないのは音読み」
 という説明は不正確で、学習上支障をきたします。「肉
 を食べたい、愛がほしい、絵が得意だ」は、「肉・愛
 ・絵」がすべて音読みですが、聞いて意味がわかりま
 す。

音とは？ 訓とは？

音（音読み、字音）⇨中国語の発音が日本語化し
 た読み方。appleを「アップル」と読むようなもの。

訓（訓読み、字訓）⇨漢字の意味を日本語で表し
 た固定的な読み方。appleの「りんご」という訳語。

音・訓の理解を深めるために、主に音だけで使われる
 漢字（字音専用字）を挙げてみるのも一法です。ただ
 し、絵（エ・カイ）、罰（バチ・バツ）のように、複
 数の音が存在するものもあるので、注意が必要です。

主に音だけで使われる漢字の例（名乗りを除く）

案	意	医	胃	域	院	駅	恩	害	勘	気
菊	句	芸	券	基	孝	紺	棧	死	詩	師
軸	式	塾	錠	職	税	栓	線	禪	僧	賊
題	段	茶	党	塔	徳	毒	脳	肺	鉢	罰
服	法	盆	魔	幕	脈	厄	役	曜	欄	寮
壘	令	論	灣	碗						

* 木村秀次著『身近な漢語をめぐる』（大修館書
 店、二〇一八）を参考にした。

(6) 漢字指導への提言③

漢字を何度も書いて手で覚えることは大事です。し
 かし、漢字の書き取りが自己目的化しては意味があり
 ません。ましてや、罰として漢字の書き取りをさせる

のは、もつてのほかです。書き取り練習の回数も、臨機応変であるべきです。字形をすぐに覚えられる漢字を必要以上の回数書かせるのは、教育的ではありません。

漢字学習では、手（書き取り練習による習熟）と頭（字源や意味などの知識の習得）は、車の両輪です。

(7) 漢字指導への提言④

書き取りのテストで、止めるべき所を撥ねたり、撥ねるべき所を止めたりした結果、バツをもらい、それがきっかけで漢字学習が嫌いになったと語る高校生は少なくありません。たしかに「干・于」は、撥ねの有無で別の字になります。また「己・巳・已」は、左部の縦棒の長さで文字が区別されます。しかし、このような例はあまり多くなく、止め・撥ねだけで漢字の正誤を判断するのは乱暴です。他の漢字と誤認されなければ、「不正確な」字体も許容する寛大さが必要でしょう。

新元号「令和」が発表された際に、官房長官が掲げた墨書の「令」は、漢字の止め・撥ねにこだわる必要がないことを示す恰好の例です。あの墨書では「令」の最終画を撥ねていますが、現実はこのような書き方をする人は、まずいないでしょう。日本漢字学会が行

ったアンケート調査でも、「令」を元号発表の墨書のように撥ねて書く人は、約四〇〇人中ゼロ人でした。（「学会通信『漢字之窗』」第一号、日本漢字学会、二〇一九年六月）

教育漢字の学年別配当の問題点や、筆順指導のあり方などは、時間の都合で別の機会に譲ります。

2 中学校の漢字教育

(1) 教科書の問題点

六書は、漢字の成り立ちや意味を理解する上で重要な概念です。しかし、その扱いは教科書により異なっていて、ページ数だけを見ても大きな差があります。五社の中学校教科書を対象に、六書の掲載学年、ページ数などを比較してみました。（配列は会社番号順による。各社の二〇一四年度使用教科書を調査対象とした。）

■東京書籍「新しい国語」一年 2 ページ * 転注と仮借も例を挙げて説明。

■学校図書「中学校国語」一年 5 ページ * 「文」と「字」の区別を説明。転注と仮借は説明だけで例は挙げていない。

■三省堂「中学生の国語」一年 2 ページ * 転注と
 仮借には触れない。

■教育出版「中学国語」二年 1 ページ * この杜だ
 けは二年生の教科書に。転注と仮借も例を挙げて説
 明。

■光村「国語」一年 2 ページ * 転注と仮借も例を
 挙げて説明。

転注と仮借の定義には、異説もあります。中学校段
 階で無理に扱う必要はありません。

(2) 漢字指導への提言①

中学校の早い段階で六書に関する教材が用意されて
 いるにもかかわらず、高校生の六書に関する知識は呆
 れるほど乏しいのが実情です。そもそも中学校で学習
 しなかったのでしょうか。それとも、教科書の学年設
 定に無理があるのでしょうか。これは私見ですが、中
 学校で六書を学習するなら、より上級の学年に配当す
 べきです。極論が許されるなら、六書の学習は高校に
 譲ってほしいとも考えます。六書はそれほど高度な概
 念です。

六書の学習成果が十分に現れない原因は、教師の不
 勉強にあるかもしれません。六書の学習に取り組むな
 ら、教師自身がしっかりした知識を持ち、自信をもつ

て授業に臨みたいものです。

六書 の 概念 (概要)

六書 〓 四種の文字の成り立ちプラス二種の使い分け

《文字の成り立ち》

象形 (形を象る)

指事 (事を指す)

会意 (意を会す)

形声 (形と声と)

《文字の使い方》 * 転注・仮借については諸説ある。

転注 〓 意味を転じて他の意味に使われること。

例 「悪」アク (わるい) ↓ オ (にくむ)。

「度」ド (ものさし) ↓ タク (はかる)

仮借 〓 他の字の音義を借りて用いること。

例 「豆」祭礼に用いる器 ↓ まめ。

「然」犬の肉を火であぶる ↓ しかり。

* 「亜細亜、釈迦」などの表記も、多くは仮借による。

(3) 漢字指導への提言②

中学校の漢字学習では、「意符プラス音符」の形声文字の概念をしっかり理解することが最大の課題です。その際、意符を部首の形式的な名称ではなく、意味として理解させることが肝要です。

意符の名前と意味の関係の例

示偏(ネ)と衣偏(ネ)は似ている……「ネ」

は神、祭壇の意だから、「神偏」と呼ぶと意味がわかる。「ネ」は名称のとおり在意。

ウ冠(ハ)と麻垂(ハ)は意味が似ている

…「ハ」は住居の意だから、「家冠」と呼んだらどうだろうか。

「ハ」は建物や屋根の意だから、「屋根冠」と呼んでみよう。「麻」の部首は「麻」で、「ハ」ではない。

邑(ハ)と阜偏(ハ) ……位置によって名称と意味

が異なる。

貝と大貝(頁) ……名称が似ているが意味は違う。

心(愛、恋、性、慕) ……どこにあっても「心」の意。

刀(剣、切、刃、分) ……どこにあっても「刀」の意。

火(焼、炎、然、燃) ……どこにあっても「火」の意。

「おおごと・ござと」、「かい・おおがい」についても、オリジナル部首名を考えさせてみましょう。

(4) 漢字指導への提言③

書き取りのテストで、「臭」の下部を「犬」と書いたらバツでしょうか。上部の「自」は鼻の形で、これに「犬」を加えると、「鼻のよい犬」の意味となり、そこから「におい、においをかぐ」という意味が生じているのです。したがって、文字学の立場からは「自十犬」は正解と言わざるを得ません。「臭」は当用漢字制定時に画減ずるために「丿」を省いたもので、新字体では字源が説明できないのです。中学校段階では、時に旧字体に基づいた字源解説も必要となります。

新字体だけでは字源を説明できない文字の例

秘(祕) 突(旧字体は宀十犬) 区(區) 医(醫)

藝・芸 ↓ 芸 罐・缶 ↓ 缶 缺・欠 ↓ 欠

弁・辨・辯・瓣・辮 ↓ 弁 余・餘 ↓ 余

(5) 漢字指導への提言④

中学校段階では、国訓(もとの漢字にはない、わが国独自の意味)の存在にも、そろそろ触れておきたいものです。国訓の知識は、漢文学習の基礎になるだけ

でなく、日本語を正しく使う上でも重要です。

国訓の例

*本来の意味↓(国訓が生じた事情)↓国訓の順で記載。

椿 太古の靈木↓(「春の木」と誤解)↓ツバキ
萩 ヨモギ↓(「秋の草」と誤解)↓ハギ
偲 つとめる↓(「人を思う」と誤解)↓しのぶ
咲 わらう↓(微笑むさまを開花にたとえる)↓
さく

(6) 漢字指導への提言⑤

中学校三年ともなると、高校受験を意識せざるを得ません。だからといって、「成就」や「必定」など、さほど重要とも思えない語の読み書きに重点を置くのは、見当ちがいです。高校生の漢字の力を点検すると、「承る」や「潔い」など、訓読みに弱いことが浮かび上がります。「形・音・義」という漢字の三要素の中で、義に当たる訓読みを、より重視すべきです。

3 高校の漢字教育

(1) 漢字指導への提言①

高校では、現代文・古文・漢文のどの分野が漢字教育を担うべきでしょうか。私は漢文の授業が漢字教育に最適の場であると確信しています。漢文は漢字だらけだから、と言ってしまつては身も蓋もありません。漢文中の用例から、漢字のもともとの意味と、わが国独自の意味(国訓)の相違に気づくことは多々あります。また、漢文の語順を知ることによって、わが国で作られた「漢語」がいかに無分別に作られているかを知ることできます。一例を挙げると、「盲導犬」と「聴導犬」の二語は、別々に作られた結果、語の構成がまったく対をなしていません。このような例は、日常語に多くあります。

(2) 漢字指導への提言②

高校三年間は、語彙を増やすのに最適な時期です。表語文字である漢字を組み合わせてできた語を、かな書きや交ぜ書きにしたら、意味がわからなくなるのは当然です。「大事な語を、かな書きや交ぜ書きで済ますのは、もったいない。」と訴えましょう。

かな書き・交ぜ書きの例

らんしよう↓濫觴（物事の始まり。「觴」は盃の意。）
へいげい↓睥睨（横目で見ると同じ意味を重ねた語。）
ら致↓拉致（強引に連れて行く。「拉」はひっぱる意。）
招へい↓招聘（丁寧に招く。同じ意味を重ねた語。）

右の四語で、常用漢字表にあるのは「濫・致・招」
だけです。この三字以外をかな書きすることには道
理がないわけではありません。だからといって、辞典
を引かず、どんな漢字かも知ろうとしないのでは、言
葉は身につけません。辞典で調べることに意味がある
のです。

(3) 漢字指導への提言③

形声文字の概念の獲得は、漢字理解の有力な武器と
なります。形声文字とわかれば、意符から意味が、音
符から読みが類推できるのです。ただし、音符を安易
に利用した慣用読みには注意が必要です。「騷擾」を
「ソウユウ」、「脆弱」を「キジャク」、「口腔」を「コ
ウクウ」と読むのは、本来の読み方ではなく、慣用読
みです。

また形声文字の中には、音符にも意味があるものが

あります。たとえば「清・精・晴・睛」はいずれも旁
の「青」が「セイ」という読みを表すと同時に、「澄
みきつた、汚れがない」という意味も表しています。
このような漢字について、一部の漢和辞典が会意形声
という分類をしているのは、このためです。

中国の宋代に提唱された「右文説」は、すべての漢
字の右の部分（旁）にも意味があると考える考え方です。
しかし、この説は極端に走っていて、ある人物が
「『波』は水の皮である。」と自信満々に語ったとこ
ろ、「では、『滑』は水の骨か。」と反論されたという
エピソードは、右文説の限界を示しています。もつと
も、「滑」の右文「骨」は「自在に動く」の意と解さ
れていますから、右文説を用いた説明も、あながち誤
りとはいえません。

形声文字の概念を利用した漢字学習の例

「莫」（ボ・バク、くれる・ない）を覚えて、
↓意味を利用すると↓暮・墓・幕・漠・獮・猯
膜などの意味がわかり、書けるようになる。
↓音を利用すると↓募・慕・墓などを書ける。
募・慕は、意符「力・心」の意味も意識できる。
慣用音の例 *ふりがなは本来の音。

消耗シヨウ 病膏ビョウコウ 撒水サツスイ 輸出シュツ 洗滌セン 独擅場ドクテン
 雜誌ザシ 冊子ソクシ 偶然コウゼン 甲乙ケツ 堪能タンネン 立案リツアン 掉尾テウビ
 攪乱ケンラン

(4) 漢字指導への提言④

よく似た字体を正確に識別することも、高校の漢字学習の重要事項です。生徒のノートや答案には、次のような字体の誤認がよく見られます。

混同しやすい字体の例

干・于・千 戊ボ・戌ジュツ・戌ジュ 侯・候 母ボ・母ブ
 宣・宜 遂・逐 未・末 味・昧 柿カ・柿コ
 崇・崇 鳥・鳥 鳴マイ・鳴オ 亨・享 昂・昂

以前、餃子で有名な町に行った時に、「字味屋」と書いて「うまいや」と読ませる看板があり、眼を疑ったことがあります。また、生徒の名簿を見ていると、「史」ではなく「吏」を「ふみ」と読ませる名前にも出会います。キラキラネームは論外ですが、漢字の読みや意味を勝手に変更した命名は、いかななものでしょうか。

(5) 漢字指導への提言⑤

熟語の訓読は、漢字の読みと意味を意識するためだけでなく、漢文訓読の第一歩でもあります。ただし、中学校の段階とは異なり、文語文法や漢文訓読の読み癖に則る必要があります。

熟語訓読の例 *○印は、漢文訓読を意識した読み方

地震 ○地震ふ △地が震える
 深山幽谷 ○深き山幽ユカき谷 △深い山幽ユカい谷
 新入(新レ入) ○新たに入る △新たに入る
 有能(有レ能) ○能有り △能が有る
 未来(未レ来) ○未だ来キたらず △未だ来キず
 可憐(可レ憐) ○憐れむべし ×憐れむべき
 不死(不レ死) ○死せず △死なず

(6) 漢字指導への提言⑥

漢字指導のために、改まって時間を設ける必要はありません。漢文の授業の端々に、漢字に関する話題を散りばめればよいのです。たとえば韓愈カンユの「雑説」に、「才美不ニ外見（才の美外に見アれず）。」という一節があります。ここを「才能の素晴らしさも表に現れない。」と訳しただけで終わるのは、もったいないのです。

○「才」は才能で、「材」と同じ。「人材」は「人体のパーツ」ではなく、人の才能のこと。副詞では「わざわざ」と読み、「やっと」の意。年齢を「五才」と書くのは、「歳」が難しいために書き換えたもの。大人になったら「五歳」と書こう。「年齢」を「年令」と書いて許されるのも、小学生の間だけだ。

○「美」は、「美点、美德」の「美」で、「すばらしさ、よいところ」の意。中国語でアメリカを「美国・美洲」と書くのは、アメリカを「よい国」と褒めたわけではなく、単なる音訳。日本で「米国」と書くのと同じ。

○「見」は「あらはる」と読み、「現れる」の意。「悪事が露見する」の「露見」は、「露・見」ともに「現れる」の意。熟語で意味を確認することを習慣にしよう。

このように、ちよつと横道に逸れることで、生徒の理解が深まり、漢字に対する興味も増すはずですよ。

4 おわりに

漢字辞典・漢和辞典の使い方についても触れる予定でしたが、時間が尽きました。

先生がしっかり勉強して正しく教え、児童・生徒が「手」と「頭」をバランスよく使って効果的に学習する、そんな理想的な漢字学習がすべての教室で展開されることを願ってやみません。ご静聴ありがとうございます。

*最後の章に、誤字が一字あります。何でしょうか。最近では、プレゼンテーションの最終画面でこの字を使う人もいますが、本来は誤字です。「静聴」は新造語で、正解は「清聴」です。

(つかだ かつろう 元筑波大学附属高等学校)